

論文

# 形象虚偽論者トリラトナダーサと シュバグプタと形象真実論者シャーキャブッディ ——後期中観思想の形成(5)——

森 山 清 徹

〔抄 録〕

ダルマキールティ (c.600-660) は PV III 213 で「外境を認めない唯識説に関して所取能取の空であることが真実である」と説いている。これに対するシャーキャブッディ (c.660-720) の注釈 PVTŚ には、その「二取の空」に関する論争が見い出される。その一方は、ディグナーガ (c.480-540) の『八千頌般若経釈』に対する注釈 (PSKV) を著わした同時代人のトリラトナダーサの見解であり、他方はシャーキャブッディ自身のものである。それは二取の形象を離れた無二知の真実に関するトリラトナダーサの論述が、シャーキャブッディによりほぼ逐語的に引用され、批判的に吟味されている。遍計なる二取の形象と別に青などの形象が実在するか否かに関して両者の見解は大いに異っている。トリラトナダーサは、ヨーギンの清浄無垢な知には二取の形象の区別を有した青などの形象は存在しないとする。一方、シャーキャブッディは遍計なる二取の形象を離れた依他起性である青などの形象が実在し覚知の自性として自己認識されるとする。また無知覚 (anupalabdhi) の理論により、トリラトナダーサの主張する知の無二は青などの形象の実在を認めない限り確定されず、すべては無になると批判し、『般若経』の「空」は全ての無を意味するのではないと解釈する。併せて無形象知識論者シュバグプタ (認識対象は内なるものと主張する者) の見解も論難する。一方、シャーンタラクシタ (MAV ad MAK46-51, 52-60) を始めとする後期中観派のテキストではシャーキャブッディの形象真実論に対し形象虚偽論としてはトリラトナダーサの無二知、凡夫知、ダルマキールティの迷乱知、シュバグプタの無形象知が批判的に吟味される。特に、カマラシーラの MĀ においては、上記のトリラトナダーサとシャーキャブッディとの見解が、そのまま取り上げられ両論とも批判される。トリラトナダーサへの論難はジュニャーナガルバが最初である。

**キーワード** トリラトナダーサ、シャーキャブッディ、形象虚偽論、形象真実論、シャーンタラクシタ

論文要旨に表した通りのトリラトナダーサの見解が形象虚偽論と見られ、それに対し形象眞実論者であるシャーキャブッディが論難を施し、同時に自らの見解を表明することの把握を目的とするが、その資料として PVTŚ における該当箇所を訳出及びその両者の見解を扱うと見られるシャーンタラクシタの MAV *ad* MAK46-51, 52-60 に対する注釈であるカマラシーラの MAP からの、ほぼ全面的な引用からなり、またサンスクリット文の得られるハリバドラの AAA（『八千偈般若経』の注釈、大註）<sup>(1)</sup>を訳出する。それらは、以前にも訳出したのであるが<sup>(2)</sup>、当時は無論その後、永らくトリラトナダーサの見解がシャーキャブッディにより引用され、論難されていることなど全く知る由もなかった。また、AAA には MAP が直接、言及しないもので詳細に論じるものとして、MAK49 に関する注釈の中で直接知覚が有分別となることの論難と MAK60 に関する注釈中には、自己認識の単一性批判として、すなわち単一な自己認識に習気の影響を認めれば、それは多様となり、習気の影響を認めなければ、衆生は難なく解脱することになるというディレンマによる論難があること。何れもダルマキールティ批判である。今回、これらの新たな知見を踏まえ再度訳出する。

## I. トリラトナダーサの形象虚偽論とシャーキャブッディの形象眞実論と後期中観派

### 1-1. トリラトナダーサの形象虚偽論

以下、本稿Ⅲと関係すると考えられるものを中心としてトリラトナダーサのテキストから彼が形象虚偽論者と見做される根拠を挙げておく<sup>(3)</sup>。1-1-1. からは、凡夫知に関し所取能取の区別をもって顕現している青などを構想されたものとし、1-1-2. からは無垢清浄なヨーギンの知は無二であり、1-1-3. からは無明の影響下にある凡夫知には元来、無二である知に二取が幻の如く顕われる1-1-5. からは、青などは勝義として無であるから、形象は無明による有垢であり、凡夫知は有垢有形象、他方、ヨーギンの無二知は無垢無形象であって、形象は虚偽であると知られる。故に、トリラトナダーサは形象虚偽論者であるといえよう。この見解が形象眞実論者シャーキャブッディにより PVTŚ において取り上げられ論難される。それは、ヨーギンの無二知に関してであり、後期中観派の場合と異なり、凡夫知に関しての論難は施されないと思われる。それは、凡夫知に関しては両論師に共通するからであろう。

1-1-1. PSKV, P348a4-7, D305a2-4、そのうち、構想されたもの (kalpita) というのは完全に清浄でない知に所取能取の区別をもって顕現しているその青などに関して言われる。諸の凡夫によって構想されたものだからである。依他 (paratantra) というのは無二なる知に自性として存在するのなら、無明 (avidyā) によって二として顕現することである。それは無明という他に依っているのであるから依他といわれる<sup>(4)</sup>。円成 (pariniṣpanna) というのは所取能取の形象を離れた知ということである。それは完全に成立している故に円成といわれるのである。

1-1-2. PSKV, P349a4-5, D305b7-306a1、無垢なる清浄ということも言葉を対治する道を修習することによって諸のヨーギンにおいて無二なる知が生起することが無垢なる清浄である。

無垢にして汚れを離れることによってとは清浄にして清らかという仕方によってということである。

1-1-3. PSKV, P353a1-3 D309a1-3 凡夫と必然関係 (pratibandha) にある知は自性として無二であっても無明によって影響され、自己のもの (ātmiya) である故に、それ自身の (知の) 自性であって、[知は] 無二を自性とするものであっても、自己の自性を覆って別様に顕現し二を自性として顕現する。[反論] どのようにであるか、[答論] 幻のようにである。例えば、幻は無自性であっても、事物であるかのように顕現する。同様に知もそうである。

1-1-4. PSKV, P354b7-8, D310b2、真理によって拒斥するというこの意味は概念知 (kalpanā) もということであり、例えば蜃気楼群に関して真実でないあり方の知である場合、水の無を退けた (水の有を把握する) 知のようなものである。

1-1-5. PSKV, P355b4, D311a4、それらの青などは勝義として無であるから、知のみに過ぎない。

1-1-6. PSKV, P356a7-b2, D311b4-6 (PVTŚ P252a1-6, DÑe204a6-b2 本稿Ⅱに引用される)、覚知の自性は相互依存によって構想されたものではない。自己の因から、そのように生起するからである。所取能取を離れているから自性が自己認識 (svasaṃvedana) のみとしてある。覚知の自性も自己認識としての直接覚知として成立しているものである。すべての者が真理を見ることはない。なぜなら無部分であるから無二が覚知の自性である。[凡夫は] 所取性に関して迷乱した (bhrānta) 種子を必然的に伴っているから無二なる知の自性である顕われが起らない。

1-1-7. PSKV P356a4, D311b2、外界にある青などとして顕現しているものは一と多として吟味に耐え得ないから真実ではない。

以上の 1-1-1. 1-1-4. 二取の区別をもつ青などを遍計、二取が無明によっていることを依他とし、その二取を離れた無二知を円成とするトリラトナダーサの三性説と 1-1-5 二取を離れた自己認識 (svasaṃvedana) のみの理論とはジュニャーナガルバによって、それぞれ SDV, SDP *ad* SDK24, 6 において批判されていると考えられる<sup>(5)</sup>。また、1-1-2 トリラトナダーサは所取能取の区別をもって顕現しているその青などを有する清浄でない凡夫の知とヨーギンの無垢清浄な無二知とを峻別する。如何なる形象も持たないヨーギンの無二知に関しては知覚が成立しないとシャーントラクシタにより MAK54-58 で論難され、また、必然関係 (同一性、因果性) を問う点から無なる形象と知とに関して MAV *ad* MAK57, 58, 凡夫知における迷乱と虚偽な形象とに関して MAV *ad* MAK60 で論難され、その自注後半では、ヨーギンの無迷乱な知に関して必然関係の不成立が指摘される。また 1-5 の二取を離れた自己認識 (svasaṃvedana) のみの理論は、二取を離れた青などの形象を実在と見るシャーキャブッディ (PVTŚ) によって批判される。この両者の論議は、カマラシーラの MĀ にそのまま取り上げられ両論とも論難される<sup>(6)</sup>。これらのことから、トリラトナダーサの唯識説は後期中観派にとって重要

な意味をもったことが知られる。なお、以上の無垢清浄なヨーギンの知と二取を引き起こす迷乱の種子を伴った凡夫知とを対比的な特徴とするトリラトナダーサの形象虚偽論は、クマールラの挙げる唯識説とも一致していると考えられ、少なくともそれは本稿でいう形象虚偽論である<sup>(7)</sup>。

1-2. ここでの論議の発端は所取能取の形象を眞実として認める論者（護法と考えられる）に対しトリラトナダーサとシャーキャブッディとによる二取を欠く無二知の成立に関する論議である。続いてシャーキャブッディによるトリラトナダーサの無垢清浄な無二知としての自己認識説への論難（*ad* PV III 213）と無二知であれば無明による虚偽な形象を有する知も無となる（*ad* PV III 217）という論難が展開する。

シャーキャブッディにとっても、所取能取の形象は遍計されたものであるから無であり、その二取を離れた無二知を真と見ることはトリラトナダーサと等しい。しかし、トリラトナダーサと異なる点は、二取の形象とは別に青などの形象を実在として認めることにある。これは、無二知において青などの形象を認めることであり、したがって、青などの形象の実在によって知は無二であることが確定され得るのである。この知は青などの形象を具え無二であることを推論により論証している。それが能遍と対立するものの認識（*vyāpakaviruddhopalabdhi*）を立証因とする推論である。すなわち

ある自性（二取）を拒斥しているもの（覚知）は、その自性（二取）を欠いている。例えば、冷たさの自性を拒斥している暖かさは冷たさの自性を欠いているように。（大前提）

覚知の自性（*rtogs pa'i ño po, bodharūpa*）も述べられた通りの仕方によって二なる自性（二取）を拒斥している。（小前提）

〔覚知の自性は二なる自性（二取）を欠いている。（結論）〕（本稿 2-2.）

この推論から導かれた「覚知の自性は二取を欠いている」に続く本稿2-2. 以下の論議の経緯は「全ては無ではない」→「青などの形象が存在する」である。したがって、青などの形象は二取の形象を欠いている、このことを遍充関係とし、一般的な意味での覚知の自性をダルミンとする推論により知は無二であることが確定される。ちょうど地面（青などの形象）を見ることによって、地面と対立する壺（二取の形象）の無が確定するようにである<sup>(8)</sup>。このことは、無知覚（*anupalabdhi*）の理論と彼の知識論とが一致していることを意味している。さらに、このことは、シャーキャブッディが青などの形象を実在と見る形象眞実論者であることを表すのみならず、所取能取の無を諸法無我の意味とし、自己認識としての青などの形象は無我ではなく、全ては無ではないと解釈することによるトリラトナダーサへの批判である。なぜなら、上の推論の意味するところは、無知覚が成立するから二取と青などの形象との対立関係も成立するということである<sup>(9)</sup>。したがって、二取が存在しないのであるから青などの形象は実在することになる。よって無二が確定される。他方、知が無二であることの確定に必要な二取の形象と対立するもの（青などの形象）を認めず、単なる二取の無を主張するトリラトナダーサに



としては無二の確定はなし得ないのである。ここに、形象虚偽論者トリラトナダーサと形象真実論者シャーキャブッディとの相違が明らかとなる。トリラトナダーサにとり無二の確定はなし得ないという論難は、シャーキャブッディに先行してジュニャーナガルバがSDV *ad* SDK6で表している<sup>(10)</sup>。トリラトナダーサの形象虚偽論はTSP *ad* TS2077において活用される[森山(2021b) II. 2-2-1. 2-2-2.]。シャーキャブッディによる形象真実論の論証であり、トリラトナダーサの形象虚偽論への批判でもある能遍と対立するものの認識による推論は、シャーンタラクシタにより同型の推論により青などの形象の無知覚が成立するとしても(MAK54)<sup>(11)</sup>、一次的、二次的な知覚が成立しないことを論じる際(MAK55, 56)<sup>(12)</sup>に活用されていると見られる。トリラトナダーサのあらゆる形象を欠く無二知への推論による論難に加え、次のものも「青などは勝義として無であり知のみである」と主張するトリラナダーサ(本稿 1-1-5.)に対してであると考えられる(PVṬŚ P254a2-3, D205b7-206a2 *ad* PV III 217 本稿 2-3.): 迷乱の種子が無であれば、覚知の自性も自己認識も無となり、外界も全くの無であるから全ては兎の角と等しいことになる→特殊性、区別があり得ない→夢を見ているときであっても、目覚めているときであっても、人の生死という言語行為を行い〈皆無な自性を有する石女の息子にも生死の区別があることになる(全て同じになる)。顛倒した顕われを有するものも起こらない(PVP P228a5-7)〉。

以上のことは、対象にも知にも粗大な顕現(sthūlabhāsa)は存在しない(Cf. PV III 211)ということによって青や黄色などは外にも内にも存在せず、兎の角と等しいと主張する論者にとっても批判となるところは等しい。ここにいう論者とはシュバグプタであると考えられる。なぜなら、彼はBASK35, 36, 46において<sup>(13)</sup>、同類の空間的に途切れていないものを把握する場合に青であるとの迷乱が生起し、分別知によって単一であると確定する。原子は単に多くの諸原子によって包囲されているに過ぎず、部分を有するものではない、と主張しているから、彼にとって粗大な顕現は内にも外にも存在しないことになる。同内容のことは、PVṬŚ P249b4-7, D202b3-5でも述べられる。このシュバグプタと見られる論者は知の対象は内的なものであると主張する者(śes bya nañ gi yin par smra ba)と呼ばれている。シャーキャブッディのPVṬŚ(P254b1, 255a1-2)には、この名称が二度に亘って使用されており(本稿 2-4. 2-6.)他に同、D221b4 *ad* PV III 346、何れも他の論者(所取能所の区別を有する青などの形象も持たない清浄無垢な無二知を主張するトリラトナダーサと思われる)の主張と同じ難点を持つとシャーキャブッディにより指摘される。それが何故、シュバグプタを指示するかということは、SDV14a5-b1, SDP49a4-b4 *ad* SDK38から知られ得る。なぜなら、そこでは、知の決知作用(yoñs su gcod pa, pariccheda)を批判的に論じるのであるが、それはシュバグプタのBASK89<sup>(14)</sup>における知は無形象であっても対象の決知作用(pariccheda)があるという主張への論難であると考えられるからである。この点は、MAV *ad* MAK19やTSP *ad* TS2008-2009におけるBASK89の引用からも支持され得ると思われる[森山(2021b) IV]。

シャーキャブッディによるトリラトナダーサの形象虚偽論とシュバグプタの無形象知識論とを同一の視点から論難する方法はシャーンタラクシタにも継承されている（MAV *ad* MAK60）。なお、トリラトナダーサとシュバグプタとの相違は、前者が、いかなる形象も持たない無二知を主張するのは無垢清浄なヨーギンの無迷乱な知に対してであるが、後者は迷乱によって粗大な青などの形象が生起するから、形象は眞実ではなく知は無形象であるとする点にある。

### 1-3. カマラシーラの MĀ におけるシャーキャブッディとトリラトナダーサとによる無二知の立論への批判

カマラシーラは MĀ 前主張で聖教に関して、シャーキャブッディの PVTŚ における見解を取り上げ、後主張で同じく PVTŚ に引用されるトリラトナダーサの無二知論及びそれに対するシャーキャブッディによる推論式を立てての論難と唯識説の表明とを順次論難している<sup>(15)</sup>。まず、シャーキャブッディの自説を表明する能遍と対立するものの認識（vyāpakaviruddho-palabdhi）を立証因とする推論（本稿 1-2. 2-2.）に焦点を当て、反所証拒斥検証が成立しないことを指摘し、それは、青などの形象が存在すれば、二取は無であることに関して、反所証（二取が存在すること）において立証因（青などの形象の存在すること）が起こらないということ（青などの形象の無）が成立しない、なぜなら、二取の存在する知に青などの形象が存在し得るからである。石女の息子には二取を欠いており青などの形象も無であるから因は不定（anaikāntika）である。また、外界を自性とするものも自ら照明する故に覚知の自性は二を具えているから、二を離れた覚知の自性という一般的な自性を有した単なるダルミン（kevaladharmin）は存在しない。したがって、所依不成（āśrayāsiddha）の誤謬となる（←本稿 2-2.）。他方、トリラトナダーサの無二知論に対しては、SDV, SDP *ad* SDK24 の場合（次項 1-4.）と同様、まず 1）所取能取を虚偽と想定することは、凡夫の知覚経験と矛盾する。汝は実際として知は二としてない形象を有するに他ならないと主張するのであるが（P182a7-8, D167a7）心の多様な形象を有し外界として区別されて顕現する青なども主体と客体という言葉習慣を区別して知らない諸の凡夫によっても概念知の誤謬を離れた心において明瞭に正しく知覚される。そのように明瞭に知覚されるその（青などの）形象の集まりも虚偽に他ならないと認めるなら、そのとき、解脱を願っている汝は二取を離れ青などの形象も顕現しない自体を有した覚知の自性（bodharūpa）に対して離性（viviktasvabhāva）であると執着している。2）青などの形象とヨーギンの無二知との必然関係の不成立の指摘、すなわち虚偽を自体とする諸の（青などの）形象は〔無二知との〕同一性（tādātmya）と因果性（tadutpatti）とを特徴とするいかなる必然関係もない。相互に排除し合って存在することを特徴とする〔無二知の〕眞実と〔青などの形象〕とが同一性の関係にあることは矛盾する。〔因果性を認めることはできない。〕なぜなら、〔青などの形象の〕非眞実なものも何かから生起することは認められないからである。必然関係がなくとも〔青などの形象は〕顕現すると確定することも不合理である。過大適用の過失（atiprasaṅga）となるからである。したがって、必ず覚知の自性（無二知）と区別なき

ことを自性とする非真実を自体とする諸の〔青などの〕形象が顕現すると認められる（本稿 1-1-1.）から同一性を特徴とする必然関係が認められなくてはならない。それ故に、両者とも虚偽であることになる。

なお、シャーンタラクシタによる MAV *ad* MAK60 の場合は、（トリラトナダーサに対して）習気と虚偽な形象との必然関係を問い、必然関係が存在すれば、虚偽な形象は依他起性となり無なる遍計所執性ではなくなると、次項の SDV, SDP *ad* SDK24ab の場合と同様であり、これらの論難は全て一致している。

#### 1-4. ジュニャーナガルバ (SDV *ad* SDK6, 24)、シャーンタラクシタ (SDP) によるトリラトナダーサの自己認識、無二知の立論への批判

ジュニャーナガルバは SDV *ad* SDK6 において上のシャーキャブツディに先行してトリラトナダーサによるヨーギンの青などの形象の存在しない無二知としての自己認識説（本稿 1-1-2.）への批判を表している<sup>(16)</sup>。それは、「知が二を欠いているもの A を知覚し、それ（二）は無であると知るのであるが、そうでなければ（A が知覚されないなら無二と知られないから）不合理である（SDV）」。シャーンタラクシタはその部分の注釈（SDP19a4）において「壺などを欠いている自性をもった地面を知らずして、そこに壺の無が知られないのと同様である」と述べている。この論議の趣旨からしても、二を欠いているもの A とは青などの形象の实在である。青などの形象の实在（地面）を知覚することにより知は無二（壺の無）であることが確定されることをダルマキールティの無知覚（anupalabdhi）の理論によって論じている（Cf 本稿 1-2）。したがって、トリラトナダーサの自己認識論を初めて批判したのはジュニャーナガルバであるといえよう。

上記以外のもので後期中観派により批判的に吟味されていると思われるトリラトナダーサによる見解とは、三性説に関するものとヨーギンの知に関するものとである。それは、所取能取の形象は遍計所執性としつつ、他方、凡夫知に関して無明によって生起するから依他起性であるという見解（上述の本稿 1-1-1. は、ジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタにより SDV 10b7-11a6, SDP 46b2-42b3 *ad* SDK24 において論難される<sup>(17)</sup>）。それは、トリラトナダーサによるヨーギンの無二知と凡夫の所取能取の区別を有する青などの形象をもつ知を考慮するものである。すなわち 1) 凡夫知に関し、遍計された所取能取の区別を有する青などの形象は無因である（SDK24ab）に対しては、あらゆる有情の直接知覚に顕現するから矛盾する。2) （トリラトナダーサの主張する凡夫知に関して）無明と二取との必然関係があれば、二取は依他起性となり（SDK24cd）無なる遍計所執性でなくなる。二取を有する知は依他起性であるが、二取はそうではないなら、二取は顕現しないことになる。依他起性である無二知に二取は顕現しないから、二取は無明によって起こるから依他起性である（トリラトナダーサ説、本稿 1-1-1.）といい得ない。この通りトリラトナダーサによる二取の区別を有する青などの形象の遍計所執性説（本稿 1-1-1.）が批判されている。この 1), 2) が上の MĀ に影響したと考え

られる。また2）は、MAV *ad* MAK57, 60 に継承されるといえよう。

1-5. シャーントラクシタの MAV *ad* MAK におけるトリラトナダーサの形象虚偽論とシャーキャブッディの形象真実論との知覚論に関する吟味

1-5-1. トリラトナダーサ、ダルマキールティ [PV Ⅲ 355cd, MAV p. 160fn.(1)]、シュバグプタの形象虚偽論への論難（その詳注、本稿Ⅲ. 3-1.～3-17

シャーントラクシタの MAV *ad* MAK52-58<sup>(18)</sup> においては形象虚偽論に対する批判が二分して表わされている。MAK54-56 では、1-2. で表したシャーキャブッディによる能遍と対立するものの認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi) を活用している (Cf.AAA 3-3.～3-5.) と考えられる同型の推論により、如何なる形象も真として認めないトリラトナダーサの形象虚偽論 (1-1-5. 青などは勝義として無で知のみである) を表し、それに対し青などの形象が一次的 (感覺的) にも二次的にも (自己の形象をもって) 知覚されないと論難する。MAV *ad* MAK57, 58 (AAA Ⅲ 3-6, 3-7), では、無なる形象と (無二) 知との必然関係 (同一性、因果性) が問われるこれはダルマキールティの理論を活用したトリラトナダーサへの批判である。すなわち同一性があれば、形象は知の如く存在することになり、知は無なる形象の如く無となる。因果性に関しては、知から無なる形象は生起しないし、無なる形象からも知は生起しない。また無二知に関して必然関係を問う方法は、上で表した通り、ジュニャーナガルバにより SDV *ad* SDK24cd で先行して表されている (本稿 1-4.)。また無形象知論者にたいしても、同様な吟味が適用され得るとというのが、次のものである。

MAK59 (AAA Ⅲ. 3-9, 3-10) からは、形象は内にも外にも存在しない、その MAP からは、この場合、形象は全くの無と表される。これは、上でシャーキャブッディが PVTŚ (本稿 2-4.) で、認識対象は内なるものであると主張する者と呼んでいた論師の考えと等しい。また MAK59 で無形象知を水晶に譬えることは、シュバグプタの見解を偈にまとめたとする TS2034 にも見られる。これらの点から MAV *ad* MAK59 (AAA Ⅲ. 3-9) は、シュバグプタの BASK35, 36, 46<sup>(19)</sup> に基づいていると考えられ、「蜃気楼などにおいて水の形象は存在しなくとも知覚される」というトリラトナダーサの形象虚偽論と批判となるところは等しいと論難しているといえよう。この両者に対して同じ過失を指摘する方法もシャーキャブッディの PVTŚ から得ている。

他方、トリラトナダーサによる迷乱知 (1-1-1, 1-1-6) への吟味が MAK 60 (AAA Ⅲ. 3-11.) で施され、習気による迷乱と虚偽な形象との必然関係 (同一性、因果性) の有無を問い、必然関係があれば、形象は依他起性となり無なる遍計所執性ではないことになり自説と矛盾する (前項、SDK24cd)。形象が依他起性なら、形象は勝義として無 (1-1-5) とはいえなくなる。この MAK 60 で習気による迷乱と虚偽な形象との必然関係を問うことはシュバグプタ説 (Ⅲ. 3-13.～3-15.) に、またトリラトナダーサによる無垢、清浄なヨーギンの無二知 (1-1-2.) に対する吟味 (Ⅲ. 3-16.) にも適用される。



## 1-5-2. シャーキャブッディの形象眞実論への批判

シャーンタラクシタの MAV *ad* MAK (46-51) においては形象眞実論への批判が先駆的なものとして表されるが<sup>(20)</sup>、その中心となっているのはシャーキャブッディの見解への論難であると考えられる。シャーキャブッディは、所取能取の形象は遍計所執性として認めないが、二取の形象とは別な明瞭に顕現する青などの形象を、勝義としても存在する迷乱の種子に依存する依他起性として認める。したがって、彼は形象眞実論者と見做されようが、この形象眞実論に対する論難の要点は、形象の多様性と知の単一性との間の整合性が問われる。知は多様な形象と別ではない (avyatireka) から形象の本性の如く多となる。また、諸形象は単一な知と別ではないから知の本性の如く単一となる。知と形象とが双方、一多の点で異なるなら、それらは別々となる (MAK46)。形象が単一であるなら、単一な全体 (avayavin) の場合と同じ難点をもつことになる。すなわち全体が同一の性質となり一形象が動けば、残りの形象も動くこととなる。一形象が黄色なら残りの形象も黄色となる。そうでなければ、形象は多となる (MAK47)。外界を認め、知が形象を有する見解においても同様である (MAK48)。続く MAK49 では形象の数と知の数とが同じと認める場合は、原子に関する吟味が施されることになる。この場合は、同類の多数の知の生起を認めるなら、間隔なく集合している諸原子の場合と同じ過失が知に関しても起こることをいっている。その MAV によれば、間隔なく顕現している青などがある者は原子を自体とするとし、他方は知を自性とするとする。前者はシュバグプタ (BASK35cd, → TS1971) を指示し、後者はシャーキャブッディであることが、PVṬŚでの両者の論議から知られると思われる。シャーンタラクシタは、空間的な制約を有する外界の原子や全体に関して指摘され得る有部分となる問題点を知にも適用するのであるが、シャーキャブッディは外界の事物は具象的なもの (mūrtatva) であるが、知は非具象的である (amūrtatva) と峻別する (Cf. PVṬŚ P250b1-5, D203a3-b1, P257a1-4, D208a5-b1)。したがって、外界の事物に関する論難は知に当てはまらないことになり、このことを外界否定の根拠とする。上の峻別を根拠にすれば、知に関しては同時に多であることが制限なく許されることになろう。それが、次のことである。MAV *ad* MAK49 前半では、シャーキャブッディと同定されている「同類の多数の知の同時生起」説が吟味されている。それはダルマキールティの PV III 501cd, 502ab<sup>(21)</sup>「同類の知は同時に多数生起しないという理論」に反することになる。この理論からすれば、同時に同類の単一な知は単一な形象を知覚するということであろうから、これは後代チベット宗義書で一卵半塊論と呼ばれるものに相当すると見られる。なお、MAK46-48 において一卵半塊論があらわされているとは思えない。なぜなら、そこでは上述の通り一と多との整合性を問い、形象が単一の場合は全体 (avayavin) に対する批判と同じになるといっているのみで、具体的な唯識説を表しているとは考えられないからである。このことはともかくとしても、同時に同類の多なる知が生起するというシャーキャブッディの主張は、さらなる誤謬をもつことが、ハリバドラ (AAA, pp.627, 28-628, 6)<sup>(22)</sup>により指摘されている。

同時に同類の知は単一であるとしても、知の多生起を認める限り、分別知は次第して生起しないことになり（← PV Ⅲ 502b, *vikalpāḥ kramabhāvināḥ*）、異種である分別知も同時に起こり得るから、直接知覚は無分別であるということに反し、また「分別は次第して生起する」というダルマキールティの見解に反することになる。これは、MAP *ad* MAK49 に見られない指摘であり、上の理論が一卵半塊論といい得るなら、それへの批判ということになる。

以上の通り、シャーキャブッディの同時に同類の多なる知の生起論は詳細に論難され、彼が形象真実論者として取り上げられていることが知られる。また彼の同時に同類の多なる知の生起説が後代、主客同数論と命名されたと考えられる。

続いて形象は多様であっても、それを有する知は単一であり得る、いわゆる多様不二論が検討されるが（MAK50）、瑜伽行派の別の論師（*rnal 'byor spyod pa pa gshan*）<sup>(23)</sup>の考えを想定して「彼らはあらゆる時に多様な形象をもち単一に他ならない知が生起すると主張するのである（MAP p.141, 9-11 *ad* MAK50）」。これに対しても、シャーンタラクシタは一と多とは相容れないと論難し、さらに、この場合も単一な全体（*avayavin*）への批判（Cf. MAK10）と同様に、覆う部分と覆われない部分との相違があり得ないと論難するのである（MAK51）。

上で言及した後代、一卵半塊論、主客同数論、多様不二論と呼ばれるものが、それぞれ独立して三種の唯識学説として存在していたとは考えられず、むしろ所取能取を欠いた無二知における青などの諸形象を真とする見解及び同時に多なる同類な知があり得るとするシャーキャブッディの形象真実論とダルマキールティの同時に同類の単一な知の生起説と多様不二論とを分析することから出ていると考えられる。

## Ⅱ. シャーキャブッディの PVTŚ に引用されるトリラトナダーサの PSKV と無二知の証明に関する部分の和訳研究

[以下の 2-1. 2-2. は、所取能取の空を説くダルマキールティの PV Ⅲ 213 の注釈中のものである]

### 2-1. PVTŚ P251a6-253a1, D203b6-205a3 *ad* PV213

[トリラトナダーサとシャーキャブッディとが受け取った護法による詰問] <sup>(24)</sup> 単一な知に二なる形象が真実であることが矛盾するなら、そうであれば、その二なる形象とは別なものが真実となろう。〈したがって以下のように、これは所取能取の形象を離れた〔単一な〕知に他ならないが、別なものが存在するのではない（PSKV P355b7, D311a6）〉。

[シャーキャブッディのみによる弁明] それ故、単一な知の自体云々 〈その単一な知の自体に関して一方でも所取あるいは能取の形象が存在しない（PV Ⅲ 213a）と（na）必ず認められるなら、二も崩れよう（PV Ⅲ 213b）（PVP P226b2, D194a2 → P226b3 *ad* PV Ⅲ 213cd）と〔デヴェンドラブッディは〕言ったのである。（PVTŚ P251a7）

[トリラトナダーサの受け取った護法による詰問] 所取能取の二も存在するのでない（無二）

なら、知であるものにとって眞実であるものが他に何か残っているだろうか、何も残っていないはずである。所取能取の形象と別な他なる自性をもったもの（眞実なもの）が諸の凡夫によって正しく知覚されることはない（PSKV P355b8-356a1, D311a6-7）。[諸の凡夫によって二取とは別の眞実なものが] 正しく知覚されるなら、眞理を見ることになる。そうであれば、衆生達は努力なくして解脱するであろう（PSKV P356a1）。それ（二取とは別の眞実なもの）は推理によっても確定（niyama）されない（PVTŚ P251b1）[あるものによってこの推理が設けられることに関して、結果も存在しない。（Cf. PSKV P356a2, D311a7-b1）]。

[シャーキャブッディの追加した詰問] というのは、まず同一性の能証（無二）から起こる推理は、その場合、あり得ない。その（無二と眞実なものとの）同一性こそが証明されなくてはならないからである（D204a2）。結果の能証（無二）から起こる[推理]も[あり得]ない。二としてない自性をもつもの（無二）と因果関係にあると証明する直接知覚と無知覚と（無二が認識されれば眞理も認識される。無二が認識されなければ、眞理も認識されない）が成立しないからである。結果を排除（P251b3）する特徴をもった因果の成立もありはしない。結果（無二）自体が成立しないからである。

[トリラトナダーサの受け取った護法による詰問]

そう（結果自体が成立しないの）であれば、瑜伽行派<sup>(25)</sup>にとってその無二の（自性）自体（PVTŚ P251b3 de kho na, PSKV P356a2 de ñid）が結果であるから、それ（PVTŚ P251b4）もプラマーナによって証明されない（からである）（PSKV P356a2）。二（を自性）として顕現しているもの（所取能取の形象）は[汝にとって] 兎の角（全くの無）と等しいから結果ではない（PSKV P356a2-3）。

[トリラトナダーサによる答弁] これに対して述べられなくてはならない。（その過失はない PSKV P356a3, D311b1。）愚かさ（moha）によって二を知られない者（護法）達によって、上のこと（詰問）が言われるの（D204a4）である。というのは、能取という言葉によって、喜びと喜びでないことなどの多なる形象を生起している内なる覚知の自性（rtogs pa'i ño bo, bodharūpa）が自己認識であると言われなければならないなら、そのこと故に、それ（能取）も無となろう（PSKV P356a3-4）。（P251b6）かえって、その知から外界の如く青などとして顕現しているもの（所取）は、一多の点で（D204a5）吟味に耐え得ないから眞実ではない（PSKV P356a4 青などが外界であると顕現しているものは）。したがって、まず（PVTŚ P251b7）勝義として知にとって区別ある所取が存在するのではない。それは無であるから、それに依存して構想された覚知の自性がこの所取にとってのこの能取の自性である（PSKV P356a4-5）という（P251b8）その能取が存在するのではない（PSKV P356a6）と述べる（D204a6）。主体と客体とは相互に依存し合って構想されたものであるから[無である]〈把握するもの（'dzin par byed pa, grāhaka）の自性は無であると述べるのであるが、自己認識のみの覚知の自性は把握するものという言葉によって[無であると]述べるのではない。〉（PSKV P356a6-7）

[シャーキャブッディのみによる答弁] まさしくそれ故に[所取性と能取性とは（PVP P226b3）] 相互に依存し合ってその二（所取能取）が確定されるから（PVP P226b3, PVTŚ P251b8）と [デヴェンドラブッディは]（P252a2）述べるのである。[というのは、知に関して両者は妥当しない。それ故、両者の空であることがその知の眞理である（PV Ⅲ 213cd）（PVP P226b3, D194a2-3）。]

[トリラトナダーサによる弁明] 覚知の自性である自己認識のみは能取という言葉によっていわれるのではない。覚知の自性は相互に依存し合って（D204a7）構想されたもの（所取と能取と）ではない。自己の因自体（P252a2）からそれ（覚知の自性）はそのように（自己認識のみとして）生起するからである（PSKV P356a6-8）<sup>(26)</sup>。その覚知の自性自体は自己認識のみとして存在しているのである。（主体と客体とは相互に依存し合う故、構想されたものであると）述べられたままの所取能取を離れているから（PSKV P356a8, Cf.SDV *ad* SDK6）無二であるというのである。（P252a3）そうではあっても、「青や黄色などが知から外界の（D204b1）如くに顕現しよう。それ（所取）は眞理ではない（Cf. PSKV P356a4）。それ故、外界のもの自体としては無であると、それ（客体）に依存している主体の自性が知覚されると主張する（P252a4）ことも眞実ではない。それ故、知覚は無二であると確定されよう」<sup>(27)</sup>と言われる。覚知の自性も自己認識の直接知覚によって成立するなら、（D204b2）あらゆる人々が眞理を見ることに（P252a5）なってしまうことはない（PSKV P356b1, D311b5）。というのはその覚知の自性に部分はないから [無二が覚知の自性である（PSKV P356b1, D311b5）]、[凡夫にとって] 所取性に関して迷乱の種子と必然的に結びついているから、覚知の自性が（覚知のままに PVTŚ P252a5 ji ltar rtogs pa bshin du）無二の確定が起こることはないであろう。したがって、[凡夫には] 無二の自性は把握される（P gzun, D bzun）として（D204b3）も、把握されないのと等しいのである（PSKV P356b1-2）。これのみとして一般的に（spyir）覚知の自性もダルミンとして成立しないのではない（PSKV P356b3, D311b6）。〈というのは、世俗と勝義との関係を承認し、あらゆる対象を損減する人（中観派）によっても必ず無なる対象を照らし出し得るものが知自体における無明であると認められる必要がある。[所取能取と] 別の形象はあり得ないからである（PSKV P356b3-4, D311b6）。〉

2-2. [シャーキャブッディのみによる答弁] そうであれば、ダルミン（P252a7）である覚知の特殊性が[迷乱の種子による所取と能取との] 二と[覚知の自性としての] 無二と[の両方] を自性とする場合、[凡夫には] 区別の自性として[二か無二かの] 確定がないから、単なるダルミンも、（把握されるものとして）確定がないのであるという考えを具えている者（トリラトナダーサ）によって[一般的にダルミンは成立しないのではない（上の PSKV P356b3, D311b6）と] 言うことはできないのである。そうであれば（区別の自性を立てない場合）、声などに関しても一般的にダルミンが成立する場合、刹那と非刹那との[両方の] 特殊性によって論争する場合、後で推理することになる（P252b1）のである。推理より以前に



利那などの自性の (D204b5) 特殊性は成立しないから、単なるダルミンも成立しないといえないなら (単なるダルミンが成立するなら)、何故、所依不成の立証因となろうか<sup>(28)</sup>。あらゆる推理に関しても一般的にダルミンは成立すると認められなくてはならない。そうであれば、論争の所依となっているダルマもダルミンが確定されるときだけに確定される場合、三相を具えた立証因を探究することは無意味 (推理は不要) となろう。それ故、この場合も一般的に喜びなどを具えているダルミンである覚知は直接知覚として成り立つ (P252b4) けれども、[凡夫にはトリラトナダーサのいう通り]<sup>(29)</sup> 迷乱が存在するから無二の自性が確定しないとしても、それ (青などの形象を具えた無二知の確定) を証明する (D204b7) ために推論が用いられるのである<sup>(30)</sup>。

ある自性 (所取能取の二) を拒斥しているもの (覚知) は、その自性 (二取) を欠いて (P252b5) いる。例えば、冷たさの自性を拒斥している暖かさは冷たさの自性を欠いているように。(大前提)

覚知の自性 (rtogs pa'i ño po, bodharūpa) も述べられた通りの仕方によって二なる自性 (二取) を拒斥している。(小前提) (D205a1)

[覚知の自性は二なる自性 (二取) を欠いている。(結論)]

以上の [形象真実論を表明する推論] (P252b6) は能遍 (二取を拒斥していない遍計されたもの) と対立するもの (二取を拒斥している青などの形象) の認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi)<sup>(31)</sup> [を立証因とする推論] である [無知覚が成立するから二取と青などの形象との対立関係も成立する]。したがって、自己認識のみという上述の (所取能取の) 二を欠いている諸法は無我であるが、[トリラトナダーサの無二知と異なり] あらゆる存在として [無我なの] ではない<sup>(32)</sup> [青などの形象は存在する] と (P252b7) いうことである [所取能取の二の否定は絶対否定ではなく相対否定である]。『聖なる般若経』 (D205a2) などそこかしこに諸法の一部の自性を否定することを説くことと、同様に生起などを否定する (P252b8) こと (不生) も [所取能取なる]<sup>(33)</sup> 遍計所執性だけを捉えてであるが、[青などの形象を具え所取能取を離れた] 無二なる依他起は [否定され] ないのである<sup>(34)</sup>。そうであれば、二 (所取能取) として顕現する知 (D205a3) のみによって [分別知としての] 生起などの区別を設ける (P253a1) のであるが、[青などの形象を具えた無二知としての] 自己認識のみによって [分別知としての生起などの区別を設けるの] ではない。(所取能取の) 二として顕現するものも虚偽であるから、それ (二取) によって確定される自性をもつもの (所取能取の形象を有する知) も虚偽に他ならないのである<sup>(35)</sup>。

[以下の 2-3.~2-7. は、次偈の注釈中に表される。PV III 217yathāsvampratyayāpekṣād avidyopaplutātmanām / vijñaptir vitathākātrā jāyate timirādivat //<sup>(36)</sup> 無明によって惑乱されている諸の自己自身には、各自に縁に依存して誤った形象を具えた表象が生起する。眼病などのように。]

2-3. PVṬŚ P254a2-3, D205b7-206a1 [以下2-4.を除く2-7.までは、トリラトナダーサのあらゆる形象を欠く無二知論に対する論難と考えられる]

それ（楽などそれぞれ自ら知覚されるもの、自己認識）は、まず無ではない。（D206a1）迷乱の種子も知自体を先としてもつものであって、それ（迷乱の種子）が無なら、覚知（rtogs pa, bodha）も無となろう。それ故に、自己認識（rañ rig pa, svasaṃvedana）のみも無であるから、また外界の対象も全くの無（śin tu med pa）であるから、この全てのものも兎の角と等しいものとなろう<sup>(37)</sup>。

2-4. PVṬŚ P254b1-3, D206a5-7 変化すること（'gyur ba）は認めるけれども、認識対象は内なるものであると主張する者（śes bya nañ gi yin par smra ba, シュバグプタ）<sup>(38)</sup>にとってもこの詰問されるべきことは同じである。というのは、その青や黄色などが外と内に存在しない<sup>(39)</sup>。すなわち、それ故、対象にも知にも粗大な顕現（sthūlābhāsa）はない。云々（PV III 211）と説かれるのである。[その青や黄色などは] 外と内に存在しないから、兎の角と同じである。その場合、[青や黄色などと兎の角とが] 無である点で（D206a7）等しいなら、（P254b3）何故、時間と空間との確定をもち生、滅、住という区分の自性をもった青と黄色などは明瞭に顕現しようが、兎の角などは[時空の確定などをもって明瞭に顕現し]ないと[詰問されなくてはならない]。

2-5. PVṬŚ P254b3-255a1, D206a7-b4 [他方、我々にとっては] この詰問されるべきことは同じではない。というのは、顛倒した顕現をもち、心と心所と等しい自性をもっている迷乱の種子は勝義として存在する。それ（迷乱の種子）も個々に限定された能力をもつのである。個々に限定されたその能力をもつもの（迷乱の種子）からも、顛倒という迷乱の生起が、勝義として自己認識のみの自体をもったものであっても、内なる惑乱（antarupaplava）<sup>(40)</sup>によって、青と（D206b2）黄色などは無であっても、外界に存在しているように生と滅などを具えているかのように語られるが、青や黄色などに外界の生と滅が具わっているのではない（知自身の迷乱による）。その場合、青（P254b7）なども、そういった（内なる惑乱によって生と滅を具えている）状態にあると述べるが、兎の角などは[知自身による迷乱によっても全く存在し]ない。迷乱（bhrānti）はそういった自性をもつのであるから。そういった[内なる惑乱によって生滅を具えている]状態の自性をもつもの（青など）はそういった状態（迷乱）の種子から生起するからである。無を指示する迷乱（兎の角）は何も存在しないまを表すが、[青などは] すべてが[無なのでは]ない。例えば、眼病（rab rib, taimira）<sup>(41)</sup>などによって（D206b4）生起した[知自身による]迷乱のようにである（P255a1）というそれは、周知されているのである。

2-6. PVṬŚ P255a1, D206b4 これ（迷乱の種子から生起すること）は、あるもの（無二知）に関して迷乱はなく迷乱の対象もないというすべては無であると主張する者（thams cad med par smra ba, トリラトナダーサ）にとって存在しないのである。まず、知の対象は内なるも

のであると主張するある他の者（シュバグプタ）によって、そのように（迷乱はなく迷乱の対象もないというすべては無であると）認められているのである。

2-7. PVTŚ P255a1-7, D206b4-207a1 [トリラトナダーサとは] 別の瑜伽行派 (Yogācāra) (シャーキャブッディ) は青と黄色などは全面的な無 (thams cad med pa sarvābhāva) <sup>(42)</sup>ではなく、[青と黄色などは] 楽などのように明瞭に (P255a3) 知覚されるからである <sup>(43)</sup>。かえって、青などは外界を自性とするものとして存在しているものではなく、能取として認められる単一な知にも第二の部分となっているものが (D206b6) 存在するのではない。この意図は知に粗大な形象としての顕現が存在するというのである。まさしくそれ故に知においてという第七格 (bdun pa, saptamī) によって能取という部分が示されているのである。例えば、内なる楽など自ら覚知を自性とするものは [所取と] 別の能取なる部分となっているものではない。知覚のみの自体をもっているものに他ならないからである。[覚知を自性とするものは] 遍計所執である (parikalpita) 所取能取の形象を離れている (P255a6) に他ならない故に無二である。それと同様に、青なども自ら覚知を自体とするのであるが、[青などは知とは] 別の部分となっているものではない。[青などは] 楽 (D207a1) などのように自己認識の自体をもつものに他ならないからである [青とその知とは同一である]。[青などは] 上述の [所取と能取との] 形象という点で二を離れているに他ならないから無二である (Cf. P252b8, D205a2 の論述と一致している)。[青などは無ではなく自己認識として存在し無二である]

### Ⅲ. ハリバドラの AAA 和訳研究 (形象虚偽論の吟味)

3-0. AAA p.626, 13-16,

ただ、始まりなき輪廻の生存として存在している存在に対する執着という習気の成熟 (vāsanāparipāka) によって諸の形象 (ākāra) が、そこ (知) に顕現する。したがって、存在は知を自体とするものであると瑜伽行派 (Yogācāra) によって理解されている。その場合も、(1) [形象真実論] <sup>(44)</sup> それらの諸形象は真実に見合う (匹敵する) もの (tāttvika) に他ならないのか、あるいは (2) [形象虚偽論] <sup>(45)</sup> [諸形象は] 影像などのように吟味しない限り好ましいものであるのかという選択肢があり得よう。

AAA pp.629, 10-634, 13 Cf. MAV, MAP *ad* MAK52-60 [(2) 形象虚偽論の吟味]

3-1. AAA pp.629, 10-17 Cf. MAV, MAP *ad* MAK52

[形象虚偽論者による反論] もし、これらの形象が真実 (satya) の自性を有するものに他ならないなら、その場合、この全てのものが矛盾したものとなろう。その知がまさしく水晶石のように <sup>(46)</sup>、青などの形象の区別を獲得していないのであるから、それがそういったものであっても、始まりなき過去からの虚偽 (alika) で顛倒した習気の成熟により土塊など (mr̥cchakalādi, PV III 354b) の上に、呪術などによって混乱した (mantrādyupapluta, PV III 354a) 眼を

もつ人における顕現として掂がりをもった (āyata) 象や馬などの諸形象のようなものが現象される (cf. PV Ⅲ 354) <sup>(47)</sup>。したがって、勝義として (paramārthatas) 知は単一の自性をもつもの (無二知) に他ならないと承認することに関して [形象は] 虚偽であるから矛盾はない (cf. PV Ⅲ 353, 357)。

そういうことから、過失を指摘する汝によって諸形象は虚偽性 (alikatva) に他ならないと説明 (理解) される。また、その (諸形象が虚偽である) ことは我々 (形象虚偽論者) によって承認されている。

3-2. AAA p.629, 17-20 Cf. MAV, MAP *ad* MAK53 [3-8までトリラトナダーサ1-1-5「青などは勝義として無である」及び1-1-1に関する吟味]

[答論] それは正しくない。というのは、凡夫に至るまでの者に理解される青などの形象を自体とするものが、極めて明瞭に知覚される、そういうもの (明瞭に顕現する青などの形象) は虚偽である。他方、知覚されていないで、明瞭に顕現している (青などの) 形象を離れた (vyatirikta) 無二知 (advayajñāna) というものが眞実 (satya) であるということ (トリラトナダーサによるヨーギンの無二知) <sup>(48)</sup> 以上に、いま勝れて説かれたものがあるだろうか。何故、非常に明瞭な [青などの形象の] 知覚に不合理があるだろうか <sup>(49)</sup>。

3-3. AAA pp.629, 21-27 Cf. MAV, MAP *ad* MAK54 [1-1-5.に対する批判 Cf. SDV *ad* SDK6]

[反論] 眞実としては、[知には形象が] 存在しない。

[答論] A (知) において B (青などの諸形象) が存在していない自性をもつその A において B は知覚されない。例えば、苦において楽などの自性をもつものは [知覚されない] ように。(大前提)

[無二] 知において青などの諸形象は存在していない (形象は無である)。(小前提)

[(無二) 知において青などの諸形象は知覚されない。(結論)]

以上の [形象虚偽論 (トリラトナダーサによる青などは勝義として無である) に対する不合理を立論する推論は] 能遍 (存在するもの) と対立するもの (存在しないものである青などの形象) の認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi) [を立証因とする推論] である <sup>(50)</sup>。[青などの] 諸の形象は虚偽なものとして決定されているから不成 (asiddhatā) ではない。[能証 (知覚されること) が] 同品 (存在するもの) に存在するから対立 (viruddhatā) ではない。その場合、もし勝義として知覚されなくなってしまうことが証明されるなら、その場合、分かり切ったことをさらに証明することである <sup>(51)</sup>。その場合、一般的に反所証 (存在するもの) において能証 (知覚されること) を排除する検証がないから (bādhakapramāṇābhāvāt)、どうして能証 (知覚されること) が異品 (存在しないもの) から排除されることが疑わしくはないであろうか、ということもいってはならない。

3-4. AAA p.630, 1-6 Cf. MAV, MAP *ad* MAK55 [1-1-5への論難]



(p.630, 1) なぜかといえば、この場合、一般的にこそ証明される、またこの場合、[反所証拒斥検証が存在するから能証は] 不定 (anaikāntikata) でもない。というのは、知覚は一次的なもの (mukhya) と二次的なもの (gauṇa) との二種である。その内、一次的な感覚的な自性をもつもの (ajādarūpa) が、また知識にとってだけの共通しない (asādhāraṇa) 自己自身の性質である。どうして、無なる形象に「一次的な感覚的な知識だけの性質が」あろうか。というのは、

知識の自性をもたないものには一次的な知覚（感覚的であること）は存在しない。例えば、虚空の蓮華のように。(大前提)

存在しないものと承認されている青などの諸形象は知識の自性をもたないもの（無感覚なもの）である。(小前提) <sup>(52)</sup>

[存在しないものと承認されている青などの諸形象は一次的な知覚（感覚的であること）をもたない。(結論)]

以上の「形象虚偽論批判としての推論は」能遍（知識の自性をもつこと）と対立するもの（知識の自性をもたないもの）の認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi) [を立証因] とする「推論」である。

3-5. AAA p.630, 6-15 Cf. MAV, MAP *ad* MAK56 [1-1-5への論難]

二次的な「知覚」も存在し得ない。なぜかといえれば、自己の形象を顕わす知の生起こそが二次的な知覚であるといわれる。それ（二次的な知覚）はあらゆる効力 (sāmarthya) を欠いている非存在な馬の角のようなもの（無なる形象）にとって全く不合理である。存在しないものとはあらゆる効力を欠いていることを特徴とするからである。(p.630, 9) というのは、

効力のないものには二次的な知覚が存在しない。例えば、馬の角のように。(大前提)

存在しないと承認されている青などの諸形象は無効力である（非存在である）。(小前提)

[存在しないと承認されている青などの諸形象は二次的な知覚が存在しない。(結論)]

以上の「形象虚偽論批判としての推論は」能遍（有効力）と対立するもの（無効力）の認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi) [を立証因] とする「推論」である。諸の形象は虚偽なものであるから能証（二次的な知覚の存在するもの）は不成ではない (asiddha)。[能証（二次的な知覚の存在するもの）が] 同品（有効力）に存在するから対立 (viruddha) ではない。したがって、以上の通り知覚は相互に排除し合う一次的なものと二次的なもの (upacarita) とによって遍充されるから（知覚であれば、必ず一次的か二次的なものである）。また、その遍充するもの（知覚）も否定されるから、それによって遍充される（一次的な、二次的な）知覚もまさしく否定されるから、[青などの諸形象が] 存在していないからではない (nāsattvāt) <sup>(53)</sup> というこの能証（青などの諸形象）が知覚において存在する余地はない（青などの諸形象が存在しなければ、知覚は成立しない）から、不定 (anaikāntikatva) ではない<sup>(54)</sup>。

3-6. AAA pp.630, 18-631, 1 Cf. MAV, MAP *ad* MAK57 [トリラトナダーサ（1-1-5, 1-1-6.）批判：知と虚偽な形象との必然関係を問う]

[非存在な形象は] 必然関係（pratibandha）によって知覚されるということも言うてはならない。というのは、[諸の形象と知とに同一性（tādātmya）の関係はない。] 諸の形象にとって知の自性は存在しない。[存在するなら] 知のように [諸の形象は] 存在することになってしまう。もし、知にとって形象の自性が承認されるなら、(p.630, 21) その場合、形象のように知は非存在となってしまう。また [諸の形象と知とに因果性（tadutpatti）はない。] 知から諸形象の生起はない。色形の無いもの（nīrūpa）（無）には生ぜしめられる自性はある得ないからである。知は諸の形象からも [生起し] ない。諸形象は虚偽（alikatva）である故、結果を設ける効力（arthakriyāsāmarthyā）を離れているからである [形象虚偽論批判]。また、同一性（tādātmya）と因果性（tadutpatti）とは別な関係は存在しない。(p.630, 24) したがって、A には B との必然関係が存在しない、その A が知覚されているとき B は必ず知覚されるのではない。

例えば、知の自体が知覚されているとき、[知と必然関係のない] 石女の息子が [知覚されない] ように。(大前提)

想定されている（虚偽な）諸形象には知との (p.630, 27) 同一性と因果性との特徴をもった二種の必然的關係は存在しない。(小前提)

[想定されている（虚偽な）諸形象は知が知覚されているとき必ず知覚されるのではない。(結果)]

以上の [推論] は能遍の無知覚（vyāpakānupalabdhi）[を立証因とする推論] である<sup>(55)</sup>。[それらに] 関係の存在しないことは、論証されたことであるから [能証は] 不成ではない。[能証が] 同品に存在するから対立ではない。(p.631, 1) また [必然関係がなくとも、知覚されるなら] すべてのものが知覚されることになるから [知覚されるものは、必ず知との必然関係がある故、] 能証は不定ではない。

3-7. AAA p.631, 1-10 Cf. MAV, MAP *ad* MAK58 [トリラトナダーサによる無明と依他起性1-1-1. に対する吟味]

したがって、また、この（虚偽な）形象は知と同時（samānakāla）に存在している故に汝（トリラトナダーサ）によって遍計された（parikalpita）ものであるその [形象] が 1) 原因をもたないもの（無因）（ahetukatva）である場合、依存するものがないから、どうして時として生じるもの（kādācitkatva）であろうか（常に生起することになる）、したがって、この場合、[形象には] 原因（kāraṇa）が説かれなくてはならない。虚偽なものに関しても、例えば、汝（トリラトナダーサ）らには世俗として知るものと知られるもの（jñānajñena）との顕現が考えられている。それと同様に我々（中観派）にとっても無形象で眞実な知に、それ（無形象で眞実な知）と全く必然関係のない（apratibaddha）無明（avidyā）による虚偽な存在し

ているもの（形象）も、世俗として別様に顕現するという事も<sup>(56)</sup>、まさしくこの（全く必然関係がない）ことによって退けられる。一方、我々（中観派）には世俗として知るものこそが知られる自性（jñeyarūpa）をもつという関係を認めるから二（知るものと知られるものと）が顕現することは矛盾しない（aviruddha）。もし、この誤謬（無因で必然関係がないこと）があつてはならないから〔虚偽な形象にとって〕2）〔無明という〕原因をもつこと（有因）（hetumattva）が認められるなら、その場合、縁起したもの（pratīyasamutpannatva）であるから所取能取の形象（grāhyagrāhakākāra）の二には構想された性質（kalpitatva）が存在しないから、依他起性（paratantratāsvabhāva）となってしまう〔Cf. SDK24cd〕。なぜかといえ、依存して生起すること（pratīyasamutpatti）と別な他に依存すること（pāratantrya）はないからである。

3-8. AAA p.631, 11-17 Cf. MAV, MAP *ad* MAK58 [1-1-5. の吟味]

〔反論〕そう（所取能取の区別をもった青などの形象が依他起性）であるとしても、それにもかかわらず、勝義的な存在性（pāramārthikī sattā）〔無二知〕が、何故に獲得されるのか。

〔答論〕というのは、知にとっても縁によって生起する自性とは別な存在性があるのではないからである<sup>(57)</sup>。それ故に依って生起することと不可離の関係にあるもの（avinābhāvin）〔所取能取の区別をもった青などの形象〕<sup>(58)</sup>が勝義的な存在性であることは避け難い。したがって、また〔所取能取の区別をもった青などの形象が〕同時に知覚されないとしても、前後（paurvāpya）して存在するから、同時（yauṅapadya）に知覚されないことになっても、〔因果性があるから汝（トリラトナダーサ）によって〕承認された形象の虚偽性（ākārālikatva）が棄て去られよう<sup>(59)</sup>。もし、上述された（依って生起する）形象も承認されないなら、その場合、認識の条件が獲得されている（upalabdhi lakṣaṇaprāpta）故、全く形象をもたない知（anākāram eva jñānam）が常にあらゆる命あるもの（衆生）達によって知覚されることになる。

3-9. AAA p.631, 18-24 Cf. MAV, MAP *ad* MAK59 [シュバグプタとの論議]

〔反論〕〔虚偽な形象が〕必ず知覚される。しかし知覚されている（虚偽な）形象により生ぜしめられた惑乱（vibhrama）によって認識の条件が獲得されていない（anupalabdhi lakṣaṇaprāptatva）から、この故に諸の凡夫にとって知覚され決定された認識は不完全であるから、それ（勝義的な存在性である無二知）を認識することはない。刹那性〔を認識することがないこと〕のように。

〔答論〕それは、正しくない。というのは、もし内にあるいは外に諸の形象があり得るなら、そのとき、それら（諸の形象）を知覚することにより生ぜしめられた惑乱によって〔認識の条件が獲得されていないから〕知覚されている（saṃvedyamāna と読む）知も確定しないということになろう。一方、内にも外にも、それら（諸の形象）が存在しないとき<sup>(60)</sup>、何を知覚することによって〔人々は〕欺かれようか。そういうわけで、（p.631, 24）〔無形象を〕知覚している人々は〔内にも外にも青などの形象が実在しないから〕無二も確定しないことになろう<sup>(61)</sup>。

3-10. AAA p.630, 16-18 Cf. MAV, MAP *ad* MAK59<sup>(62)</sup> [トリラトナダーサによる 1-1-4. に関する吟味]

[反論] 蜃気楼などに関して水などの形象は存在していなくとも、[虚偽な水としての形象が] 知覚されるから、[知覚において青などの諸の形象は存在しないという立証因は<sup>(63)</sup>] 不定 (anaikāntika) に他ならない。

[答論] それは[不定因]ではない。なぜなら、その場合にも、もし水などの形象が内にも外にも存在しないなら<sup>(64)</sup>、そのとき、それ（水などの形象）は全く存在しない (atyantāsat) から、どうして知覚されようか、したがって批判となるところは [3-9. の何を知覚することによって欺かれようかというシュバグプタ説のもつ難点と] 全く同じである（存在していなければ、必ず知覚されない）。(Cf. MAV, MAP *ad* MAK59, PV Ⅲ 211, PVTŚ P254b2)。

3-11. AAA pp.631, 25-632, 8 Cf. MAV, MAP *ad* MAK60 [3-12、まで、トリラトナダーサへの批判：迷乱と虚偽な形象との関係 (1-1-1, 1-1-6) の吟味]

[反論] 虚偽な形象を顕わし出すもの (saṃdarśana) が、迷乱 (bhrānti) のこの自性に他ならない、それ故に形象は非存在であっても、迷乱によって知覚が生起しよう。

[答論] それも正しくはない。というのは迷乱 (bhrānti) という言葉によって (1) 惑乱によって生起した習気 (vibhramotpattivāsanā) を具えた因である (hetubhūta) 知の状態にあるものが意味されているのか、あるいは (2) 同種の習気という源を具えた迷乱した結果を自性とする知自体が [意味されているのか]。その内、(1) 第一の選択肢の場合、その因（習気を具えた迷乱知）に対して、諸形象には必然関係が存在しないから、それ（習気を具えた迷乱知）によって、それら（諸形象）が知覚されることは不合理である。[さもないければ] 過大適用の過失となるからである。また [諸形象にとって習気を具えた迷乱知と] 因果性 (tadutpatti) を特徴とする必然関係も存在するに他ならないということも不合理である。[習気を具えた迷乱知と虚偽な形象とに因果性があれば諸形象は] 以前<sup>(65)</sup>のように依他起性 (paratantratva) となってしまう [遍計所執性でなくなる] からである。

もしも、(2) 第二の選択肢であるなら、その場合も、諸形象にとって [習気を具えた結果としての迷乱知との] 同一性 (tādātmya) を特徴とする必然関係が存在していることになろうが、因果性を特徴とする [必然関係] は存在しない。それ（習気を具えた知）と同時 (samānakāla) に知覚されるからである。しかし、同時に存在する両者にとって因果性にあることは不合理であるからである。したがって、また迷乱のように、それ（知 śes pa MAP p.161, 2）と別ではないから [(諸形象は] 依他起性となってしまう [遍計所執性でなくなる] ことは避け難い。したがって、これ（迷乱によって虚偽な形象が知覚されること）はつまらぬ論議である。

3-12. AAA pp.632, 9-27 Cf. MAV, MAP *ad* MAK60

[反論] 眠り (supta) などに入っている人において迷乱した所取能取の形象は存在しないから、



単一な自性をもった自己認識は真実であろう。

[答論：トリラトナダーサへの批判] <sup>(66)</sup>それは正しくない。意識は法界を対象としているとしても、単に心所の法 (caitasikadharma) を把握するのではないから、[心、心所の] 集まり (kalāpa) を識別する故、多であることを自性とするからである <sup>(67)</sup>。もし、対応関係をもった知の自性の集まりにとって所取能取の関係を全く離れたもの (自己認識) の自性が確定されるなら、そうだとすると、多様性にこそ突き進むことになる。というのは、(1) [自己認識に] 迷乱という習気 (bhrāntivāsanā) が存在すると汝 (トリラトナダーサ) は認めるのか、あるいは (2) 認めないのであるか、という二種の選択肢がある。(AAA p.632, 16) もし、(1) 第一の場合 (自己認識に迷乱の存在を認める) なら、その場合、真実でない形象 (vitathākāra) に執着するという習気こそが無明 (avidyā) に他ならない <sup>(68)</sup>。また、その習気が効力であるといわれる。また効力が原因である知自体となっているものにほかならないということである。したがって、以前の原因となっている無明の自体である知から、真実でない形象に対する執着を有した後の結果の生起には、無明から同様に顕現することがあり得る、したがって、力づくで [自己認識は] 多様なものとなる (単一性が崩れる)。また等無間縁 (samanantarapratyaya) から [結果の] 確定があるといってはならない。なぜかといえば、上述の通りの (無明による) 知識が等無間縁であるから、これ (自己認識に迷乱の習気を認めること) は、つまらぬ論議である。

[反論] その場合、習気を自体とする効力は区別される。

[答論] それは正しくない。[習気を自体とする効力は] 真実であり多なる効力と別ではないから、効力を自己の性質とするもののように、同時に知には多であることが付きまとう。またそれに関して過失 (単一な知に多なる形象が存在することになる矛盾) <sup>(69)</sup>は指摘した。あるいは、同様に単一な知とは別ではないから、諸の効力が知自体の性質のように単一となることは避け難いから、どうして [習気 (無明) によって起こる知は] 等無間縁と区別されるものであろうか。もし、そうではなく、(2) 第二の主張 (自己認識に迷乱という習気が存在すると認められないこと) が考えられるなら、その場合、[習気が断ぜられているから] すべての衆生が努力することなく解脱しよう云々となってしまうことは回避できない。

### 3-13. AAAp.632, 27-633, 3 [シュバグプタによる主張 (1)] <sup>(70)</sup>

凡夫にとって、あらゆる知が [習気による] 青などの形象に染まることを離れているなら、その場合、[知が] 単一性を損なうことはないであろう。多様な自性をもたないからである。それ (知) にとって青などを知覚する自性が確定せしめられることは、[知には] それ (青など) を知覚する自性があるから (AAA p.633, 2 tatsamvedanarūpatvāt) <sup>(71)</sup>であるが、青などの自性となってしまうからではない [青とその知とは区別の否定のみである]。というのは、形象は対象を把握させる手立てに他ならないが、それ (対象) 自体ではない。

### 3-14. AAA p.633, 4-6 [シュバグプタによる主張 (2)] <sup>(72)</sup>

一方、外界に存在するかのように顕現している青などが見られる、それは知の形象によって「自己認識」ではないけれども、青などの知覚を知覚している認識者は、同様に迷妄（moha）から（AAA p.633, 6）外界を自性とするもの（bahīrūpa）によって青などを決定する<sup>(73)</sup>。

3-15. AAA p.633, 6-23 [シュバグプタへの批判]

[答論] それ（迷妄から外界を自性とするものによって青などを決定すること）も誤りである。というのは、もし、青などを具えたもの（知）にとって「迷妄との」何らの必然的關係（pratibandha）もないなら、その場合、どうして青などの知覚があろうか。なぜなら、活動しない（nirīha）知識には、その自性とは別に対象を把握させる手立てはない。その自性とは別に（青などの）形象が確定されるということであるから過大適用の過失となってしまうからである。けれども、その自性から「青などの形象が」生起することによってこそ知には作用のあることが知られる。それ（知の作用）こそがそれ（知）の対象を把握させる手立てである「シュバグプタによって知の決知作用（pariccheda）である」と言われる。しかし、そのこと（知の対象を把握させる作用）に関して過失（過大適用であること）はすでに述べられた。

[シュバグプタによる反論] 青などはあらゆる仕方で全く存在しない<sup>(74)</sup>。（AAA p.633, 12）

[答論] そうではない。というのは、もし青などが内にも外にも存在しないなら<sup>(75)</sup>、どうして、それ（青など）が無分別（avikalpa）な心に、このより明瞭なものとして知覚されようか。ということが「シュバグプタによって」説明されなくてはならない。「青などが」全く顕現しないというこういったことはいい得ない。そ（青など）の顕現が、あらゆる人々に知覚を成り立たせるからである。また、ある者（シュバグプタ）によって迷妄した自体（mūḍhātman）によって同様に「外界を自性とするものによって青などが」決定されると<sup>(76)</sup>、いわれているから、明瞭な顕現をもつもの（無分別な知に）に分別としての対象性（vikalpaviśayatā）があることは不合理でもある<sup>(77)</sup>。

（AAA p.633, 17）[シュバグプタによる反論] そうではあっても分別（vikalpa）として「外界を自性とするものによって青などが」決定される<sup>(78)</sup>。

[答論] それは正しくない。なぜかという、もし無形象なあらゆる知が知覚されるなら、その場合、その後起こってくる分別によってもそれぞれ確定した青などの形象が判断されること（adhyavasāya）も不合理に他ならない。必然的關係（pratibandha）が存在しないからである。「迷乱と青などの形象とに必然的關係があれば、青などの形象は依他起性となる」

[反論] このこと（青などの形象が判断されること）こそが迷乱（bhrānti）の自性である<sup>(79)</sup>。

[答論] この（迷乱によって青などの形象が判断される）場合、「青などの形象は」依他起性（paratantratva）となってしまうから、どうしてこれ（青などの形象）には迷乱に関して（との）必然的關係があろうか。したがって「迷乱と青などの形象とには」必然的關係が存在しないから、分別の対象性（vikalpaviśayatā）としても存在していない青などには知覚されることはあり得ないから、これ（迷乱によって青などの形象が判断されること）は不合理である。

(p.633, 23) [以上有迷乱知の吟味]

3-16. AAA pp.633, 24-634, 9 [以下トリラトナダーサによるヨーギンの無迷乱知 (1-1-2.) に対する吟味]

[反論] そうではあっても (存在していない青などが知覚されることはあり得ないとしても)、清浄でない (apariśuddha) 状態にある者にとって虚偽に他ならない多様な顕現を有した知は、清浄な (pariśuddha) 状態にある者 (ヨーギン) においては迷乱 (bhrānti) を離れているから、無二を自性とする [知] は、単一な自性をもつに他ならない<sup>(80)</sup>。

[答論] もし、清浄でない状態にある者にとって、あらゆる知は虚偽 (alika) に他ならないなら、その場合、清浄な状態にある者において、その真実を自性とする知は何から生起するのか、ということが述べられなくてはならない。また [有因であるとしても] 虚偽な [形象] から真実を自性とする [無二知] が生起することはあり得ない。それ (虚偽な形象) には効力がないからである。あるいは、効力 (sāmarthya) がある場合、それはどうして虚偽であろうか。同種のもの (所取能取の形象) も虚偽である場合、別のもの (無二知) も、どうして真実であろうか。したがって、それ (無二知) は原因をもたないもの (nirhetuka) に他ならないであろう。また、それ (無二知が原因をもたないこと) は不合理である。[無原因なものは] 常に存在することになってしまうからである。迷乱を離れているからということも述べられてはならない。なぜなら、もし清浄な状態にある者にとってあらゆる形象の排除されること (nivṛtti) があり得るなら、その場合、以下のことが必ずもたらされる。迷乱が排除されても諸形象が排除されることがあり得ない限り、その場合、上述の理屈によって、それら (諸形象) には [迷乱との] 必然的關係 (pratibandha) が存在しないからである。また、必然的關係が存在しない場合、一方が排除されたとき、必ず他方も排除されるということはない。牛と馬などのように<sup>(81)</sup> (馬がいなくても、必ず牛もいないということはない)。[そうでなければ] 過大適用の過失となるからである。

3-17. AAA p.634, 10-13 [無二知が元来成立しているなら、無二知は常住となる、1-1-3. に関する論義]

[反論] ある人にとって、戲論を離れ元来成立している無二知 (advaya-jñāna) だけは単一なものであろう。

[答論] それは不合理である。なぜなら、[無二知が] 元来、成立しているなら、個々に確定した拠り所を把握することによって依存する (原因をもつ) ことがないから、何らのものにも同種の存在性は断たれることはないであろう (常住なものとなろう)。したがって、また依存することと対立しよう。[AAA. 以下の部分の訳は森山 (2021b) に続く]

## 結論

シャーキャブッディの PVTŚ には、トリラトナダーサの唯識説すなわち所取能取の区別を有する青などの形象を離れた無二知論が引用され吟味される。依他起性である所取能取を離れた青などの形象を有する無二知を主張するシャーキャブッディは能遍（二取を拒斥していない遍計されたもの）と対立するもの（二取を拒斥している青などの形象）の認識（vyāpakaviruddhopalabdhi）を立証因とする推論を立て、自説を論じると共にトリラトナダーサ説を批判している。それは、無知覚（anupalabdhi）の理論により青などの形象の实在によって所取能取の無は確定される故、青などの形象と所取能取との対立関係（viruddha）を認めないトリラトナダーサの無二知論は成立しないというものである。このトリラトナダーサの主張が形象虚偽論として、それに対するシャーキャブッディの主張が形象真実論として、それぞれ、シャーンタラクシタによって前者には必然関係（pratibandha）の不成立の指摘、後者には形象（多）と知（一）との一多の矛盾の指摘により批判的に吟味された。トリラトナダーサの無二知論をダルマキールティの無知覚論により批判することはシャーキャブッディよりも先行してジュニャーナガルバが表わしている。また、トリラトナダーサのヨーギンの無迷乱無形象知と共に「認識対象は内なるものと主張する者」すなわちシュバグプタによる形象は迷乱に基づく故、真ではなく知は無形象であるとの見解が論難されることは、シャーキャブッディにより表され、シャーンタラクシタに継承される。カマラシーラは、トリラトナダーサの無二知論とそれを引用批判するシャーキャブッディの推論式をそのまま取り上げ、両者の見解共、論難している。ハリバドラは形象虚偽論の吟味において、ダルマキールティの単一な自己認識論を論難している。その際、習気を認めれば、自己認識は多様性を帯びることになり、習気を認めなければ、衆生は難なく解脱することになるとディレンマにより論難する。このことから、無明としての習気による迷乱と虚偽な形象との必然関係を問うことが、トリラトナダーサ、ダルマキールティ、シュバグプタの三論師の知に対する見解を形象虚偽論の視点から扱い共通して論難し得る方式となっている。

### 〔略号〕

AAA: Haribhadra, *Abhisamayālaṃkarāloka* *Prajñāpāramitāvyākhyā* / BASK: Śubhagupta, *Bāhyārthasiddhikārikā* / 成論: 『成唯識論』佐伯定胤『新導 成唯識論』 / MAK, MAV: Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṃkāra-kārikā*, -*vṛtti*, MAP: Kamalaśīla, *MA-panjikā*, ed. by M. Ichigo (1985) / MĀ: Kamalaśīla, *Madhyamakāloka*. / NB: Dharmakīrti, *Nyāyabindu*. / NBT (V): Vinitadeva, *Nyāyabinduṭṭika* / PSKV: Triratnadāsa, *Prajñāpāramitāsaṃgrahakārikāvivarāṇa*, P. No. 5207, D. No. 3810 / PV: Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*. / PVP: Devendrabuddhi, *Pramāṇavārttikapañjikā*, P. No. 5717, D. No. 4217 / PVTŚ: Śākyabuddhi, *Pramāṇavārttikaṭīkā*, P. No. 5718, D. No. 4220 / SDK, SDV: Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-kārikā*, -*vṛtti*, SDP: Śāntarakṣita, *SD-panjikā*. / ŚV: Kumārila, *Ślokaṭīkā*, ed. S.D. Śāstrī, Varanasi, 1978



〔注〕

- (1) 形象真実論、形象虚偽論を吟味する部分については Moriyama S. 森山 (1984a) pp.46-58, 原子批判については、同 pp.37-46. Moriyama S. (1984b) pp.15-35、一郷 (1985)
- (2) PVTŚ については森山 (2008) AAA について、及び AAA が MAV, MAP *ad* MAK と一致する部分に関しては Moriyama S. (1984a) (1984b)
- (3) 森山 (2020) p.41. 森山 (1993) で形象虚偽論者も、シャーキャブッディの見解であると考えたが、誤解であった。ここに訂正する。
- (4) 服部 (1961) は、このトリラトナダーサの無明に依ることを依他とする点に注目している。Cf. 本稿 AAA Ⅲ. 3-7. 1) 2)
- (5) 森山 (2009a) pp.28-37 (6) 森山 (2009a) pp.37-42
- (7) ŚV śūnya15-17ab  
我々の主張では、勝義としては、たとえ知の自体は清浄 (svaccha) [無二知] であるとしても、それにもかかわらず無始以来の輪廻において以前の知の生起した多様な習気によって多様な原因をもった迷乱 (upaplava) から自らに対応して所取能取によって汚された青などが区別されているかのように生起している。別 (外界) の対象に依存しているのではない。Cf. 海恵 (1960) p.34, 戸崎 (1979) p.9 fn. (16) 本稿Ⅲ. 3-1. クマーリラの唯誠説批判に対しシャーントラクシタ、カマラシーラは TSP *ad* TS2077において形象虚偽論と形象真実論とを提示して弁明している。Cf. 森山 (2021b) Ⅱ. [2-2-1]、[2-2-2]
- (8) SDP19a3-4 *ad* SDK6, 森山 (2009a) p.29 及びその注(13) Cf. TSP *ad* TS2077
- (9) Cf. PV Ⅲ 88, 戸崎 (1979) p.162 (10) 森山 (2009a) pp.28-33
- (11) MAK54 の注釈 MAV, MAP とも重なる AAA 本稿 3-3
- (12) 本稿 3-4. 3-5. (13) 森山 (2003) pp.9, 21, (2008) p.24, fn.56)
- (14) 森山 (2021b) Ⅳ. 及び [4-1] BASK89 (TSP p.684, 15-16 *ad* TS2008-2009) *katham tadgrāhakaṃ tac cet tatparicchedalakṣaṇam / vijñānaṃ tena nāśaṅkā katham tat kimvad ity api //* [シュバグプタへの反論] どうして、それ (知) が、それ (対象) を把握するものであるのか。[シュバグプタによる答論] 知はそれ (対象) を決知作用する特徴を有する。したがって、それ (知) が、どうして、どのように [それ (対象) を把握するのか] ということも懸念してはいけない。Cf. Hattori (1960), 神子上 (1986) pp.24-25、シュバグプタによる知の決知作用説はジュニヤーナガルバにより SDV *ad* SDK 38 で取り上げられ論難される。森山 (2021b) Ⅳ. 他に MAV p.74, 12-14 *ad* MAK19
- (15) 森山 (2009a) pp.37-42 (16) 森山 (2009a) pp.28-33 (17) 森山 (2009a) pp.33-37
- (18) MAV, MAP *ad* MAK52-60 と AAA と重なる部分、Moriyama S. (1984b) pp.15-35, 本稿 3-1~3-14, MAV, MAP *ad* MAK59, 60 に関してはシュバグプタへの批判も含む。
- (19) 森山 (2003) p.9, (2008) p.24, fn.56), 60)
- (20) その詳注 AAA については Moriyama S. (1984a) pp.46-58, 森山 (2009b)
- (21) 戸崎 (1985) pp.185-186 (22) Moriyama S. (1984a) pp.53, 54
- (23) 小林 (1984) p.74, Cf. PV Ⅲ 221
- (24) 以下のものも含めてここでの対論者は所取能取の形象を真実として肯定する (依他起性と認める) 論者であり、また二取を兎の角と等しく位置付ける唯誠説を論難している。したがってこの対論者は護法であると考えられる。『成論』第八 (30) 又若二分是遍討所執應如兎角等。非所縁縁。……相・見分有漏・無漏皆依他起。
- (25) 森山 (2009a) p.38, MĀ 後主張に取り上げられるものは、汝と呼ぶ形式となっている
- (26) Cf. SDV *ad* SDK6 においてジュニヤーナガルバにより論難される。森山 (2009a) pp.28-33
- (27) TSP *ad* TS2077 所取と能取との形象を離れた無二であれば全ては無になるとの詰問に知の自相 (青などの形象) は無ではないことを補強するために引用されている。これはシャーキャブッディの方法をカマラシーラは活用している。

- (28) 本稿 1-3, MĀ P181b6-182a3, D166b7-167a4 で批判
- (29) Cf.PSKV P356b1-2 上のトリラトナダーサによる反論
- (30) MĀ では、以下からが答論、森山（2009a）p.38 以下
- (31) Cf. NB2.39, 戸崎（1979）p/164, fn. (231) vyāpakaviruddhasiddhi, 森山（2009a）pp.38-40, MĀ P181a4-182a5, D166a5-167a6 でカマラシーラはこの推論を批判している、反所証（二取があること）において立証因（青などの形象）を拒斥する検証がない、凡夫知においては二取の区別をもった青などの形象があり得る、MAK454, AAA 本稿 3-3 における形象虚偽論批判の際に活用されていると思われる。
- (32) Cf. TSP *ad* TS2077 知の自相は無ではない, MĀ P181a7, D166b1, thams cad dños po med pa
- (33) Cf. P255a5-6, D206b7
- (34) 森山（2009a）p.37, MĀ 前主張、勝義として不生なのではない。岩田（1981）p.153に訳出。2-7. 最後部も、同 p.154に訳出。
- (35) 森山（2009a）p.37MĀ 前主張 P144a6-8, D134a5-7 に取り上げられる。
- (36) 戸崎（1979）p.315
- (37) これ以下の論述を要約して示せば、無として特殊性、区別があり得ない→夢を見ているときであっても、目覚めているときであっても、人の生死という言葉行為を行い〈皆無な自性を有する石女の息子にも生死の区別があることになる（全て同じになる）。顛倒した顕われを有するものも起こらない（PVP P228a5-7）, Cf. TSP *ad* TS2077 前半
- (38) 本稿 1-2 (39) 本稿 1-5-1, 3-15.
- (40) PV III 361cd, 戸崎（1985）p.47, PV III 217 (41) PV III 362d, 戸崎（1985）p.47, PV III 217
- (42) Cf. TSP p, 708, 13 *ad* TS2077 森山（2021b）[2-2-2]
- (43) Cf. TSP *ad* TS2077 後半、知の自相は全て無ではない 森山（2021b）[2-2-2]
- (44) 例えば、本稿 2-7. 最後部、形象真実論に関する部分の訳出、森山（1984a）,（2009b）pp.18-21
- (45) 例えば、本稿 1-1-1. の凡夫知、形象虚偽論に関する部分の訳出、森山（1984b）, 本稿に続く部分は（2021b）、それぞれ AAA と MAK, MAV, MAP との固定は（1984a,b）参照
- (46) 安慧は水晶を遍計所執性の無自性を表す喩として用いる。山口（1975）pp.242-243、沖（1982）p.208 (36) Cf. MAV *ad* MAK52 (47) ダルマキールティが形象虚偽論者であるという意味ではないが、類似した言明が見られる。Cf. ŚV śūnya 15-17ab 本稿 注(7)
- (48) 本稿 1-1-2. 1-1-1. 1-1-5. ここにいう無二知は出世間知であることをカマラシーラは表わしている。MAP p.147, 16-17 *ad* MAK53 'di ni 'jig rten las 'das pa yin no shes ston par byed de /
- (49) Cf. SDV11a1, SDP40b5-7 *ad* SDK24ab 森山（2009a）p.33, 二取も直接知覚される。MĀ P182a5b3, D167a6—森山（2009a）p.41 凡夫も明瞭に知覚する。
- (50) Cf. 本稿 2-2. シャーキャブッディによる推論の活用 Cf. PVTŚ P252b6, NB2.39
- (51) V, tadā siddhasāadhanam により読む
- (52) 勝義として無なる青などの形象には一次的、二次的知覚が成立しないという論難はシュバグプタ（BASK35、青などの形象は迷乱知による）に対しても同様になされる。Cf. TS 2040~2043 森山（2021b）III.、上の ajaḍarūpa Cf. TS 1999, MAK16
- (53) Cf. AAA p.629, 22 asaṃvidyamāna
- (54) AAA のテキストでは、この後に AAA p.630, 16-18 が続くが、それは MAV *ad* MAK59 の内容に関する注釈と見られる故、MAP のその部分に関する注釈の順の方が正しいと思われる。したがって、3-9. AAA p.631, 18-24 *ad* MAK59 の後に 3-10. として移動する。
- (55) Cf.SDP41b6-7 *ad* SDK24ab, 森山（2009a）pp.35-36, SDNS Part IV. [II.V.]
- (56) Cf.SDP42b1 *ad* SDK24cd, 森山（2009a）p.37 ⑥ [反論]
- (57) Cf. MAV P64a8, D67b1, Moriyama S. (1984b) p.26, fn.124)
- (58) MAP p.155, 10-11. 1-1-1. (59) Cf.本稿 1-1-2. 1-1-5.
- (60) Cf.PVTŚ P254b 1-2, D206a6-7, 本稿 2-4, PVTŚ P249b5-6, D202b3-4 森山（2003）p.21、本稿

AAA. 3-15

- (61) Cf. SDV 4b3 *ad* SDK6c, SDP19a3-4), 森山 (2009a) p.29、本稿 1-2 無知覚 (anupalabdhi) の理論によって確定できない。
- (62) AAA のテキストには混乱があるので、論議の内容を考慮し、また MAP p.157, 11-18 に従い、ここに移動した。なお青などの形象は知覚されるなら必ず存在するから、不定因ではない
- (63) Cf. MAP p.157, 12 *gañ la gañ dños po med* (64) 他に蜃気楼と水の形象に関して森山 (2020) p.37 注 (4) p.53 [4]
- (65) Cf. AAA p.631, 9-10 *paratantratāsvabhāva*, 本稿 3-7.
- (66) 凡夫にとって単一な自己認識は眠りに入っているときであって、目覚めているときは、知は所取能取を具えることになるというのが、直前の「反論」の意味であると考えられる。
- (67) Cf. MAV *ad* MAK34 (68) Cf. PV III 336, 337, 戸崎 (1985 pp.19-21 (69) Cf. MAK46, 49
- (70) 以下は MAV p.162, 5-8 〈①知は知覚するのみである (Cf. BASK92c *rig pa tsam du zad mod kyi* //)。誤った習気によって惑乱されることで、青などの知覚としての形象だけが生起しよう。(習気による青などの形象の生起)〉に対する注釈
- (71) Cf. BASK89 = TSP p.684, 15-16, 注(4)
- (72) 以下は MAV p.162, 9-12 〈②それ (知における顕現) は青であると理解してのことであって、[知に] 青などの相は存在しない (Cf. BASK35, TSP p.673, 15 *ad* TS1971)。そう理解することにおける迷妄 (moha) の自体が外界の青などを想定させるものである。〉に対する注釈、(Cf. BASK99 吟味するまに設けられた諸の青として知覚することを知において増益して語るのであるが、何らの形象も存在するのではない)。
- (73) Cf. AAA. 3-15. p.633, 16, *mūdhātmanā tathāvasīyata iti*
- (74) 青などは視覚の対象であるから粗大なものである。シュバグプタは BASK35 において青などは迷乱であるとしている。外界の対象を形成するとされる原子も無部分単一であるから、多数集合しても粗大さを形成することはできない。Cf. [シュバグプタによる反論 (2), 3-14 AAAP.633, 4], BASK99 神子上 (1986) p.26
- (75) Cf. 本稿 3-10 AAA p.630, 17-18, PVTŚ P254b1-2, D206a5-6 知の対象は内なるものと主張する者に対する批判, MAV *ad* MAK59, 本稿 3-9, 3-15
- (76) Cf. AAA. 3-14. p.633, 5-6, *mohāt tathā bahirūpeṇa nīlādikam adhyavasyatīti*
- (77) 明瞭な顕現をもつ知は無分別だからである。無分別知における明瞭な顕現 (形象真実論?) を根拠とする迷妄による外界の自性として青などを想定することの批判
- (78) Cf. BASK101, 103, TS2040, Cf. BASK36, 35
- (79) Cf. BASK35, TSP p.673, 13-17 *ad* TS1971  
*tulyāparakṣaṇotpādād yathā nityatvavibhramah / avicchinnaśajātīyagrahe cet sthūlavibhramah* // 例えば、別の類似したものをもった刹那が生起する故に、常住なものであるという迷乱がおこるように。間隔のない同類のものの把握がある場合、粗大であるとの迷乱が生起するのである。
- (80) トリラトナダーサによる無垢清浄なヨーギンの無二知、本稿 1-1-2
- (81) NB III. 32, NBT (V) P25a2-3. D20b4-5, 森山 (1993) p.192

#### 〔参考文献〕

- 岩田 孝 (1981) : Śākyamati の知識論、『フィロソフィア』第69号
- 太田心海 (1970) : 認識の対象に関する考察 *Tattvasaṃgraha, Bahirarthaparīkṣā* の和訳研究 (下)、『佐賀龍谷学会紀要』第17号
- 沖和史 (1982) 無相唯識と有相唯識、講座・大乘仏教 8—唯識思想
- 海恵宏樹 (1960) ŚLOKAVĀRTTIKA の関説する仏教説、『印度学試論集』No.1
- 小林 守 (1984) : 『中観莊嚴論』に見られる形象真実説、『印度学佛教学研究』33-1

- 戸崎宏正（1979）：『仏教認識論の研究』上巻、（1985）：同、下巻
- 服部正明（1961）：ディグナーガの般若経解釈、『大阪府立大学紀要』（人文・社会科学）9
- Hattori M. (1960) : *Bāhyārthasiddhikārikā* of Śubhaguputa, 『印度学佛教学研究』8-1
- 神子上恵生（1983）：シュバグプタの極微説の擁護—知識の認識対象の問題—、『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第22集、（1986）：シュバグプタの *Bāhyārthasiddhikārikā*、『龍谷大学論集』第429号、（1987）：シュバグプタの唯識説批判—認識対象（*ālambana*）をめぐって—、『仏教学研究』第43号、（1996）唯識学派による外界対象の考察（3）— *Tattvasaṃgraha* と *Tattvasaṃgrahapañjikā* の第23章外界対象の考察—、『龍谷大学論集』第449
- 森山清徹（1993）後期中観派と形象真実論・形象虚偽論—*Śākyabuddhi* との論争と修道論—、渡邊文麿博士追悼論集『原始仏教と大乘仏教』
- （2003）シャーントラクシタの中観思想の形成とシュバグプタ、シャーキャブッディ—自然界（原子、物質）と知識との峻別の根拠—、『佛教大学総合研究所紀要』第10号
- （2008）：後期中観思想（離—多性論）の形成と仏教論理学派—デーヴェンドラブッディ、シャーキャブッディの *Pramāṇavārttika* III（kk.200-224）注の和訳研究—、『仏教文化研究』第52号
- （2009a）：後期中観思想—所取能取を離れた自己認識（*svasaṃvedana*）批判と知の一多の吟味—の形成とシャーキャブッディ（上）、佛教大学『文学部論集』第93号
- （2009b）：同、（下）、佛教大学仏教学会『仏教学会紀要』第15号
- （2020）：ジュニャーナガルバの『二諦分別論』とダルマキールティのプラマーナ論—後期中観思想の形成（4）—、佛教大学『仏教学部論集』第104号
- （2021b）：形象虚偽論者トリラトナダーサ、シュバグプタ、形象真実論者シャーキャブッディと後期中観派—後期中観思想の形成（6）—、佛教大学『仏教学会紀要』第26号
- Moriyama S. (1984a): The Yogācāra-mādhyaṃika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alikākāra-vādins of the Yogācāra School. Part 1: A Translation of Portions of Haribhadra's *Abhisamayālaṃkāra-lokā Prajñāpāramitāvyākhyā*. 『佛教大学大学院紀要』第12号 / (1984b) *ibid.* Part 2、坪井俊映頌壽記念佛教文化論攷
- 山口益（1975）：『佛教における無と有との對論』山喜房佛書林

（もりやま せいてつ 佛教大学名誉教授）

2020年11月16日受理